東京大学宗教学年報 XXXVIII（2021 年）192-206 頁

書　評

ジャン・ボベロ／ラファエル・リオジエ（著）伊達聖伸／田中浩喜（訳）『＜聖なる＞医療　フランスにおける病院のライシテ』勁草書房，2021 年 2 月，288 ページ，3,700 円

古澤　有峰

本稿はフランスの研究者，ジャン・ボベロ（Jean Baubérot）とラファエル・リオジエ（Raphaël Liogier）による著書の邦訳『＜聖なる＞医療　フランスにおける病院のライシテ』（伊達聖伸・田中浩喜訳，勁草書房，2021 年）についての書評である。ちなみに私自身が原著を最初に手にしたのは，ヨーロッパの研究者達からプレゼントされた数冊の本の中に出版されたばかりのこの本が含まれていたことに遡る。医療・社会科学系の研究仲間であるその友人達が本書を選んだ理由として，視点の違いが興味深かったからだという説明があったことをよく覚えている。これは，翻訳者である伊達が「あとがき」で記していることとも整合性のあるエピソードである為，その中から本書の特徴がよく示されている部分を，以下に引用したい。

「…病院と医者に焦点を当てて近代医療の特徴を論じる枠組みが，いわゆる医学史や医療社会学の分野ではなく，宗教および世俗の歴史社会学と哲学であるという点が，本書の持ち味だと言えるだろう。すなわち，宗教から世俗へと政治的実権や人びとの世界観が移っていくなかで医療が「神聖化」されたこと，そうして覇権を握った近代医療がある時期より「脱神聖化」されてさまざまな相対化の渦に巻き込まれるなかで試練に晒されている様子が，特にフランスの文脈において語られるのである。このような研究は，ありそうに見えて，実はなかなかない。」(p.283)

制度的に見れば，近代において学校や病院のものとされる機能の多くは，元々は教会に所属していたものであった。しかし学問史として考えた場合，それは別々の範疇（学校は教育史，病院は医療史）に分かれており，それぞれ特徴に違いがみられるのである。つまり，近代以降の世俗の体系における二大領域としての教育と医療を，それぞれ代替宗教の視点から批判的に分析する研究において，医療分野においてはそのような「世俗の宗教性」はより排除されるものとして少なくとも表向きは捉えられていた為，近代医療や病院を宗教とライシテの歴史と組み込むタイプの研究は少なかったのだと考えられる。つまり，ここで見られる二つの異なる「教権主義」の対立が，「神聖化／脱神聖化」という言葉で表現されているとも解釈出来るという訳である。

本書の構成は，以下のとおりである。全体としては二部に分かれ，最後に補論が二つ，と

いう構成になっている。翻訳にあたっては，「田中が最初に訳したものに伊達が手を入れ，フィードバックするという作業を章ごとに何度か繰り返した。日本語として意味がわからない部分はなくすように努めた。不明な点や誤りと思われる箇所は著者に尋ね，その回答を訳文にも反映させている。」(p.287)という。人文系分野においては，若手研究者が恩師や先輩とともに共訳・執筆に参加し，そうした中で学びながら研究を深めていくというのが常である。翻訳者二人のうち，既にその道を通ってきた伊達とともに翻訳をおこなった田中には，今後，未だ日本では少ないこの研究分野の発展に寄与する研究者になることを期待したい。

序　論
　医療理性批判
　共和国の聖域としての医療
　医療の世俗化
　医療の聖域としての病院
　生の公共サーヴィスとしての病院

第Ⅰ部　医療の神聖化と脱神聖化――歴史社会学の観点から

第１章　医療の神聖化――フランスにおけるライシテの裏面
　医療の政治的重要性
　医療と教育への信頼と信仰
　危機に瀕する医療制度への信仰
　医療制度の創設（一八〇三年）
　ライシテ化の第一段階
　医療化の狙い（一八〇四年）
　人類学的断絶と二つのフランスの争い
　宗教から医療へ――移行と葛藤

第２章　医療の勝利とライシテの確立――「白衣の男たち」の君臨
　医師は「慰めの嘘」をつく
　延命か痛みの緩和か
　ライシテ化の第二段階
　パストゥール――医療の勝利に貢献した化学者
　魔術化された世俗化
　ライシテ化と医療
　医療と二つの権力
　カトリック内部の刷新と医療の優位
　包括的な医療化のユートピア

第３章　医師と女性――医療教権主義の実態
　医療の恩恵を受ける女性

修道女と女性看護従事者
修道女の活動がもたらした医療化
修道女と病院のライシテ
修道女と看護婦
羞恥心に関する論争
女性は医師になれるか
教権的機能，父権的ファルス
一九六〇～七〇年代の変化

第４章　勝ち誇る聖職者から不確実な聖職者へ
マイケル・バリントの神学的医療観
自覚的な医療教権主義
反医療の潮流
医療と国家の分離を求める声
医療教権主義と反医療教権主義のはざまの患者たち
医療の複数化と新しい異議申し立て
生命倫理の転回
人類学的問題の刷新
尊厳死――良心の自由のための新たな闘い

第Ⅱ部　医療理性の危機

第５章　医療――社会とその矛盾を映す鏡
社会の「危機」としての病院の「危機」
近代病院における理論と実践の矛盾
表象－価値－決定－行為の連続体

第６章　産業型社会の健康，ポスト産業型社会の健康
健康観の象徴的変化と具体的変化
病院における四つの健康の定義
医療の凡庸化と医療専門職の抵抗
病院の表象と新しい健康観――充実と自律
個人世界系の健康論
病院の危機の中心にある三種類の価値観の錯綜

第７章　医療と病院――幻想の劇場
病院の産業化
ドクター――別格の地位
医学の進歩という産業型社会の幻想
専門技術者の躍進と医師の象徴的抵抗
逆戻りのリスク――病院は貧困者を対象とする新封建型施療院へと向かうのか

病院とポスト産業型社会の規範――適応と抵抗

第８章　脱幻想化されてもなお共和主義的な医療のために
表象の変化が病院組織に与える影響
新しい病院ガバナンスの理念上の目的とイデオロギー的機能
病院ガバナンスをめぐる象徴的闘争
「個人世界系」健康新宗教の支配者と被支配者
「主体の政治学」の源泉としての個人世界主義の健康観
医療を脱神聖化しつつ病院を救うには
あるべき病院の姿とは

結　論　新しい医療に向かって――聖の減退，生の増進

参考文献

補論１　コロナ禍における医療の脱神聖化と産業主義体制の危機（ラファエル・リオジエ）
補論２　一人の介護者という立場から見る現代フランスの医療（ジャン・ボベロ）

訳者あとがき

続いて，本書の著者二人について筆者の考えも交えながら紹介をおこないたい。歴史学と社会学の研究者であるボベロは 1941 年，現在のヌーヴェル・アキテーヌ地方（地域圏）のオート=ヴィエンヌ（県）で生まれた。歴史的な交差路に位置し，伝統的に左派の影響が強いとされるこの地域の出身であることが，その後の彼の研究者としての在り方に影響を与えたのは確かであろう。またボベロは，プロテスタントの神学部で学んだ経験も持つ。私自身はスイスへの留学経験があることから，フランスについて考える際には，スイスのフランス語圏の視点，中でも特に「プロテスタントのローマ」とも呼ばれる，スイス・ジュネーブ側の視点からみる傾向がある。その為，ボベロの著作を読む際には「カトリック（教会）の長女」と言われるフランスの（公共宗教，また脱宗教性としての）ライシテを，特にプロテスタントとの関係で研究した彼の動機にいつも関心を持っていたが，こうした研究背景を知り納得した覚えがある。

このようにボベロはプロテスタントとライシテの歴史社会学を専門とし，関連する数々の講座を創設・担当した後，現在は高等研究実習院名誉学長や名誉教授を務めている。翻訳者の伊達による「ライシテの専門家」という言葉の通り，ボベロは長年にわたってこの分野の良心ともいえるような立場から多大な業績を残してきた研究者である。こうした背景が，本書に前述のような特徴を与えた理由の一つであるといってよいであろう。邦訳もすでに数冊あり，日本にも何度か来日している。2016 年の来日の際には，書評者はボベロ夫妻にお会いし直接お話をする機会に恵まれた。お二人の仲睦まじい様子を間近で拝見したことは，後述する，本書における「補論」をどのように捉えるのかという視点に影響を与えたであろうことを記しておきたい。

また本書では，フーコーをはじめフランスの医療社会史の先行研究への言及はあっても，

かれらに多大な影響を与えたとされる（アメリカの大学や博物館，スイスのチューリッヒ大学などで教鞭を取っていた）アーウィン・H・アッカークネヒトの『パリ，病院医学の誕生』には触れられていないのは興味深い（この点については，やはり伊達もあとがきの中で指摘している）。これは地理と歴史の相違というような内包する対立構造による元々の眼差しの違いや，同じ医学史といっても基本的に自然科学寄りのアッカークネヒトに比べて，ボベロはやはりライシテ寄りの人だったからなのではないかというのが私の仮説である。この様な側面から見ても，ボベロは彼の別の著作のタイトル通り，まさに「情熱と理性のあいだ」にあるものとしてのライシテを，長年に渡って研究してきた人物であると言えるのではないだろうか。

もう一人の著者であるリオジエは 1967 年生まれで，ボベロとは一世代違う。書評者はリオジエ以降の世代に属するが，彼の視点に賛同する点が多いのはそうした理由によるものだけではなく，学際的な領域にわたる彼の研究背景や研究対象によるところが大きい。哲学と宗教社会学を専門とするリオジエは，英語圏やフランス語圏において公法，政治学，哲学の修士号を取得後，西洋における仏教をテーマとした研究により，エクス＝マルセイユ第三大学にて博士号を取得している。現在はエクス＝アン＝プロヴァンス政治学院で教授を務める彼は，パリの国際哲学コレージュでも教鞭を執っており，宗教とライシテに関する研究のみならず，グローバル化やアイデンティティの問題などの現代的テーマの研究をおこなう研究者である。

具体的な例としては，近年の#Me Too 運動に触発されて執筆した著書（『男性性の探求』伊達聖伸訳，講談社，2021 年 3 月）においては，男性支配の構造とその解体について，男性側からの問題意識や動揺・気づきに基づいた論考をおこなっている。本書では，男性であるリオジエ自身が，差別される側ではないことにより自らの言葉が正当性を持たないのではないかと常に逡巡しながら，その悪の根源を系譜学的に追求しようとする姿勢が印象深い。またフランスのイスラム嫌悪をめぐる動向が報道される際に，メディアから真っ先に意見を聞かれるような立ち位置にいるリオジエは（2015 年に起きたシャルリー・エブド襲撃事件の後，フランス議会からの意見を求められた最初の専門家であった），メディアそのものがそうしたイスラム嫌悪という神話を構築した責任を批判的に検討してもいる。そして私の研究の文脈からも興味深いのは，彼のトランスヒューマニズムについての研究である。これは現在，世界規模で問われている人間概念そのものの揺らぎや変貌について，宗教社会学・哲学者の立場から様々な考察をおこなうものである。

こうした彼の研究と前述のボベロの研究の共通点を敢えてまとめるならば，歴史・社会・文化的に形成されてきた，自分（達）とは異なるものとしての「他者」を客体化し，モノとして所有するとともに，資本として蓄積するということの是非に対する研究であると言える。これは同時に，その他者に対する「われわれ」とは誰なのかを問う作業でもあり，その様な研究や実践を，その問いの決定権をめぐる対立において優位とされる側から，果たしてどのようなアプローチでおこなえるのか，その共約可能性と不可能性にどう向き合っていくのかというのが，世代や分野を超えた二人に共通のテーマであるというのが，二人の著作を読んできた私自身の理解である。

本書は，前半部分をボベロが，そして後半部分をリオジエが担当するという構成になっている。また初版時にはなかった補論を，二人がそれぞれに寄せているのも興味深い。さらに

出版後に，翻訳時には紙媒体には入りきらなかったボベロの補論の一部を，出版社ホームページよりオンライン上で公開するという工夫もおこなわれている（https://keisobiblio.com/2021/02/26/seinaruiryo_tokubetukokai/）。初版の出版からおよそ 10 年後の邦訳までの間を埋めるこの試みは，本書の議論をさらに深めるものとなっているが，それと同時に，この補論をどう捉えるのかについては，実は議論のあるところだというのが書評者の考えである。これについては本稿の後半でまた改めて触れることとして，まずは本書の構成や内容を順に読み解いていきたい。

序論においてボベロは，医療理性批判から始まり，共和国の聖域として存在する医療や病院がいかに世俗化され，生の公共サーヴィスの場として機能していったのかについて説明をおこなっている。ボベロは医療の聖域としての病院について，以下のように言及している。

「医療が聖なるものであるならば，その聖域にしてそれを具体化した教会という立場にあたるのは，病院とりわけ公立病院ということになるだろう。公立学校が世俗的（ライック）な教育の実質的な聖域であるのと同じようなものである。二〇〇五年以降は「公立病院の地位と社会的運営方法の近代化（「二〇〇七年病院計画」と名づけられた事業の名称）を成し遂げるため，この科学の教会とその大聖堂（カテドラル）たる大学付属病院[CHU:Centres Hospitalières Universitaires]の改革を目指す数多くの試みがなされていた。
この計画のおもな狙いは，改革を断行するところまでいかないとしても，少なくとも病院の機能不全を指摘して，組織面だけでなく象徴面も射程に入れた病院制度の抜本的な変化を呼びかけることにあった。」(pp.7-8)

また原著の初版当時，アメリカでは実質的な国民皆保険を実現する為の様々な政策（通称「オバマケア」）を推進していたが，それは現在もなお続く大変な道のりとなったことは周知の事実である。アメリカは伝統的に自由主義的な観点から国民皆保険制度がおこなわれてきておらず，高額の医療費の支払いに窮して自己破産する人々や無保険者の問題など，深刻な医療格差の問題が長年に渡って議論されていたという背景がある。一方でそのようなアメリカから見れば時に賞賛されることもあるフランスの医療制度が，フランス国内においては批判の対象となっており，その根本的な問題点について，ボベロが以下のように言及しているのは示唆に富む。

「病院は郵便局と同じ公共サーヴィスだが，切手でさえ無料ではない。病院は単なる公共サーヴィス以上のものではないだろうか。生のサーヴィスと言えるのではないだろうか。かつての病院は半ば宗教的なサーヴィスだったが，そのようなものであり続けることはもはやできないだろう。しかし，いずれにしても，病院は依然として国民的努力の現れであって，それは私たちが――財政的な三段抜きに――どれほどの金額を健康に掛けるのか，あるいは掛けないのかを体現している点で，私たちが集合的生に与える意味を反映している。私たちが作り出す病院の表象は，私たちの社会をまとめあげる中心的な価値観に合致しており，私たちの個人的な実存と集合的な実存に関わる諸領域に，明示的にであれ暗示的にであれ，どのような優先順位が付けられているのかを反映しているのである。」(pp.10-11)

ちなみにこの序論において，ボベロが再三にわたって，病院や医療を宗教的な比喩で皮肉を込めて読んでいるのも興味深いところである（例：「フランスの医療と大部分の病院にとってのヴァチカンないしメッカであるパリ病院公共厚生局」「病院は親しみやすい場所とは言えない…まるで不気味な教会堂のようである。」など）。こうした姿勢が，この後に続く第 I 部全体の論調にも繋がっており，医療の聖域の構築をめぐる社会史的な分析が行われていく。ちなみにリオジエが担当する第 II 部は，医療の聖域が経験している今日的な危機をめぐる論考が中心である。

続く第 1 節の見出しである「医療理性批判」が，18 世紀のドイツの哲学者，エマニュエル・カントによる著書『純粋理性批判』から取ったものであることは明らかだ。ボベロはカントがこの著作において，大文字の理性と小文字の悟性を区別している事に触れながら，それが本書の主題にとって少なからぬ意味を持つとしている。つまり，「理性は崇高で不可視で遍在するものであり，悟性の隠された霊感の源である。それゆえ，近代は二重になっている。近代は，確かに悟性が可能にした科学と技術の進歩を価値あるものとするが，この進歩を理性という聖なる審級に従属させており，理性のみが進歩を正当化することができるからである。」(p.1)とするボベロは，一部の人たちがポストモダンと呼ぶものを，理性の聖性の問い直しに起因するものとしているのは興味深い点である。つまり，そのような世界においては，科学や技術の目も眩むような進展をもたらしているのは，あくまで方向性も準拠点もない状態の悟性固有の力学の展開によるところが多いと彼は考えているのである。

近代の再帰性を前提とした上で，こうした理性をどの地点から捉え分析するのか。これについては，さまざまな学問的アプローチが考えられるのであるが，例えば同じフランスの西洋古典学研究者，フランソワ・アルトーグが指摘するように，現代社会に生きる私たちの経験そのものが，過去や未来への視点に比べてあまりに「現在」に置かれ過ぎていることそのものへの批判もある。過去と未来が解体された状況下において，脱文脈化された過去の事象に基づき構成された未来への価値判断が，不当に婉曲され平板化した「現在」によって構成されるならば，それは未来への座標軸を誤らせるものとなり得る。書評者はこれを，境界面や接点などの異なる二つのものを仲介する作業として捉えており，それを措定する際，情報や権力の非対称性，ポリティクスやエコノミーによる（相互）作用を不問にすることは出来ないと考えている。

アルトーグ自身もこうした「現在主義」が，古典学に限らず広く他の専門領域に浸透してはいないかと危惧しているわけであるが，書評者はこの視点を多くの部分で共有するものであり，この問題は科学や社会，宗教やスピリチュアリティを含む領域に多岐にわたる問題点となっているとする立場にある。時代や分野，地政学的な差異の「あいだ」を行き来しつつ，このような「現代主義」的な「現在」から人々が解放されるための空間を再構築することが，現代においておよそ古典学の担う役割の一つであると考えられるのであるが，このような視点が資料や歴史に基づいた精緻な分析に依拠せず，起源とされるものへの感情的な同一化となって一部の集団の利益の為に悪用されてしまった場合の危険性は，現在私たちが生きる社会のいたるところで繰り広げられる惨状が証明するところである。

これについて，歴史社会学の観点からボベロが導き出している論点が，前半の「第 I 部 医療の神聖化と脱神聖化――歴史社会学の観点から」の中に，またリオジエが宗教社会学・哲学の立場から論じているのが，後半の「第Ⅱ部　医療理性の危機」の中にあると読み取る事が出来るのではないかというのが書評者の考えである。前述のようにボベロとリオジエ

は，前半部と後半部で役割分担をおこない，全体として補い合いながら，連続する過去・現在・未来について，共通した批判的意図による執筆を試みており，これはいわば，より客観的・理性的なアプローチから歴史と現在の「あいだ」のバランスを取ろうとする試みでもある。このような読解への補助線を引いた上で，本書の内容に引き続き触れていきたい。

ボベロが第 1 章のタイトルに付けたように，フランスにおける医療の神聖化とは，実のところはライシテが抱える課題と表裏一体の側面を持つものである。医療と教育には政治的にも重要な位置付けがなされたが，そこには 19 世紀ヨーロッパにおける公権力や政治的なるものが，科学を支援するとともに依存する度合いを強めたという背景がある。医療と教育は，人々を導く新たな道徳的制度として政治的に見做され，オーギュスト・コントが主張したように，宗教が単独では実現出来ない近代的な善のあり方を体現するようになった。

ボベロは，こうした医療制度への信仰のプロセスにおいて宗教色が薄められ，医療制度の創設（1803 年）が求められたこと，ライシテ化の第一段階や医療化（1804 年）がそれぞれ相互に関係していること，またこうした変化がフランスにおける死生観の変化や新たな象徴体系の創出（「人類学的断絶」「二つのフランスの争い」）に繋がっていったことを指摘している。またこうした動きが「公認宗教制度」の基礎が築かれていく時期と重なっているのも興味深い点である。

こうして医療が勝利し，ライシテか確立されたところで「白衣の男たち」の君臨が始まったとするのが，続く第 2 章である。ここでは医師は隠蔽のパラドクスを抱えた「慰めの嘘」をつく存在として描かれている。また延命・痛みの緩和などについての議論においては，意味を巡る争いと権力をめぐる争いが混じり合い，そこには大きな矛盾が生じるようになっていったことが指摘されている。こうして医療は宗教を超える道徳的正当性を獲得するようになり，これがライシテ化の第二段階（公立学校のライシテ化と政教分離法）と繋がっていったというのがボベロの指摘である。こうして医療は国家に対する独立性を保ちながら，教育・学校と同様に「共和国精神」の制度的な柱となっていったのである。

これに拍車をかけたのが「パストゥール革命」と呼ばれるものである。感染症と伝染病の制圧を可能にしたこの革命が，医療を「科学の聖職」と見なす流れを促進することとなったのは，まるで現在のコロナ禍において世界中で見られる状況を彷彿とさせるものがある。共和主義的な象徴体系の中で，こうして医療化は善行として認識されるようになり，医師は公共善の為に務める道徳的知の担い手とされた。これは世俗化自体がある種の魔術化されたものへと変化したことを意味していると言ってもよい。宗教的道徳に抗して社会改革をおこなう人たちと認識された医師は，こうして権力を持つことで様々な団体を形成・所属するようになった。

新たな世俗的（ライックな）精神の象徴は，ライシテ化と医療という形で至る所に見られるようになった。しかしその出現の仕方はまちまちで，看護のライシテ化はあまり進展しなかった一方で，場所のライシテ化（十字架の撤去，病院内の礼拝堂の廃止など）は，社会における世俗化のプロセスが優勢な中で進められ，同様のことは墓地のライシテ化においても見られた。生者と死者の共同体は分たれ，カトリック的な墓地観からの脱却や個人化による葬儀の自由が広められるようになっていった。

ボベロは人間の身体（とその漸次的な劣化）という表象を，マルクス主義者にとっての下部構造と同じような役割を持つものであるとしている。またこうした見方は共和派エリー

トに一部共有されているが，唯神論者（スピリチュアリスト）の共和派哲学者とは対立していること，人間という存在についての唯物論的な理解を抑制するという意味において，イギリスのプロテスタント・エリート層との共通項をここに見出していることも興味深い点である。このようにして医療が持つに至った権力を，自らの目的を達成する権力と，この目的を達成する為に他者に行使する権力の二つに集約して考えると，その二つを備えた医療が最終的に成功を収め，それにカトリック教会が適応していくことになったのは，少なくともこの時点では当然の帰結であったようにも見えてくる。

医療の規範やルールに適応していくようになったカトリック教会は，様々な医療協会を設立，医療実践の世俗化を受け入れやすくする為の工夫を施しながら（例：病気治しの聖人の参照など），科学と宗教の妥協を図っていった。結果としてこうした動きがカトリック内部の刷新と医療の優位を決定づけることとなり，むしろ医療的価値との間でジレンマを生じさせることにつながったのは重要な点である。こうした流れが，後の第二ヴァチカン公会議やその後の展開において様々な変更をもたらした（例：終末の秘蹟の意味自体の世俗化や医療化）ことを考えれば，これは宗教実践が医療実践に包摂されたことを意味すると言ってよいであろう。

こうして，ある種の包括的な医療化のユートピア形成がそこに追求されていたことが示唆されるのであるが，それが第二次世界大戦後の社会保障制度の創設の際に，「費用が社会主義化された自由主義的な医療」という，およそ成立し得ないパラドクスとして生み出されたとするボベロの指摘は正しい。相互扶助という古い伝統と，金銭の自由を求める医療側からの要求，つまり医療の社会化が医療を聖職の地位から公共サーヴィスに格下げすることを否定する医療専門職の立場とは，そもそも相入れないものなのであり，そこで浮かび上がってきたのは，新たな医療教権主義とも呼べるようなものの実態であった。

続く第 3 章では，こうした医療教権主義によってもたらされた強権的・父権的な機能とジェンダーの問題が取り上げられている。ボベロはこの点について，「医師と女性の関係を研究すれば，医師が世俗的で没宗教的な聖職者に思われてくるだろう。」(p.77)とする。こうした論点が本章においては中心的に展開されており，例えば女性は医療の恩恵を受けた一方で，出産など女性が関わっていた領域の医療化が進むことで，助産婦をはじめ女性が関与していた職域から，むしろ女性が排除されるようになっていったこと，医師と修道女の対立は存在したものの，修道女達が求めたのは医療制度がある程度の宗教的な要素を許容する医療化であったことから，実のところ修道女の存在が医療化プロセスの一翼を担った部分があることなどが指摘されている。

いずれにしても女性に与えられたのはあくまで従属的な役割であり，権力の移動が教会的なものから医療的なものへと変化していったことが示唆されることで，当時生じていたのが異なる二つの世俗化の様態，つまり医療制度がある程度の宗教的な要素を許容する医療化であったことをボベロは指摘しているのである。こうした神聖性の移行は，宗教が道徳的関心を医療に課していったイギリスとは異なり，フランスでは健康の追求と宗教・道徳的関心が宗教側に残る傾向があったこと，また同じフランス国内でも，医療のライシテ化は学校のライシテ化に比べると徹底していなかったことなども示されているのが興味深い。

いずれにしても修道女と女性看護従事者達に生じた変化は，必ずしも女性達にとって好ましいものばかりではなかった。教会権力による直接的な病院の支配は終わり，病院におけ

る宗教的中立性が求められるようになった為，医療現場においては修道女を看護師に替えるべきだと考えられるようになっていったが，それも看護専門職の女性の地位の向上に直接つながるものというよりは，あくまで女性が男性と平等な地位に置かれない限りにおいてという条件付きのものであった。世俗の看護師と修道女の配置の有無は，そのまま教権主義と反教権主義の対立の表れであったが，学校のライシテ化と同様に，病院のライシテ化が進んでいく中で，修道女の排除のあり方に違いが現れた（学校から修道女が排除された一方，病院からの修道女の排除はそれほど進まなかったのは，職業教育上の問題も関係していた）。

また都市部と地方でも違いが現れており，政治的で意図的なライシテ化はむしろパリのような都市部で進められ，一方で地方では緩やかな世俗化の動きが生じたことで，病院修道女の割合は少なくなっていったという。実際のところ，看護婦は「世俗的（ライックな）修道女」と看做されただけで，能力への要求は高い反面，男性医師への反論と言った「学者まがいの越権行為」をおこなうことは禁止され，謙虚さと服従の方がむしろ優先事項とされた。医師による助産婦の周縁化と医療専門職への女性の進出への批判も，これと同じ問題系にある。総合的に見ると，医療の専門化は反女性的なものではあったが，医療専門職は女性を内部に受け入れ組み込んでいくことにより，医学の女性蔑視（ミソジニー）に対抗していったというのがボベロの見方である。この点については，教権的機能としての父権的要素をどのように見るのかという点において，英語圏における論争，特にナイチンゲールの業績がもたらした医療看護分野における功罪などの議論と比較して考えるのも面白いかもしれない。

1960 年代から 70 年代にかけて，医学部での女性の比率は大きく変わっていったものの，女子医学生は将来の医師候補というよりは，医師の奥方候補として想定されるという，認識される支配的な表象をめぐる問題は依然として残っていた。こうした問題は男性医師が女性患者に対する時の問題としても現れたとするボベロは，男性医師が自らの職務の正当性を無意識に守る為に，こうした側面を考えない傾向にあったと指摘する。ここには前述した二つの権力の両義性が再び浮かび上がってくるのも興味深いところである。こうした羞恥心や避妊・中絶をめぐる異議申し立てへの反応は，フランスでは不問とされてきた伝統があり，こうした動向は新しい時代状況に際しては，大局的・長期的に見て失敗するとボベロは見ているのである。

このような新しい時代状況としての「ライシテ化の第三段階」として生じるのが，医療業務の脱神聖化であり，それを取り上げたのが次の第 4 章である。ロンドンのタヴィストック診療所を拠点に活動していた精神分析家，マイケル・バリントによる「神学的医療観」を例に，ルーティーン化した医療に生じている脱神聖化について，社会・象徴的な次元から分析を試みている。バリントの発想の中心にあるのは「医師の使徒的役割」であり，バリント自身がその著書の中で認めているように，治療中の対人関係について説明する際に，神学から数多くの表現を借用していることからこのように呼ばれたという経緯がある。

自覚的な医療教権主義に基づき，デュルケム的な実践理論を構築しようとしたバリントは，ある意味で医療権力の強大な正当性を内面化していたのであり，フランスにおいてはやがて現れた反医療の潮流に押し流される結果となった。1970 年代には，イヴァン・イリイチも指摘したように，近代医療システムは宗教的支配のような様相を呈するようになり，宗教と国家の分離モデルと同様に，医療と国家の分離を求める声が上がるようになった。患者はそうした医療教権主義と反医療教権主義の間に立たされるようになり，それがひいては

医療の複数化や新しい異議申し立てにつながっていったというのが，医療人類学や医療社会学，医療・社会史的な見解である（この辺りは，本文中でジャン・ブノワなど，書評者にとって馴染みのある名前が見られるとともに，英米系の研究モデルの影響が見て取れた部分でもある）。そして，死をめぐっての制度的競争相手であった宗教に対して社会的に勝利した医療は，今度は医療を強制的に押し付ける「新宗教」として批判されるようになったという訳である。

こうした中，そこに加わったのが，生命倫理による新たな転回である。フランスでは 1980 年代に入って初めて，国家倫理諮問委員会[CCNE: Comité consultantif national d'éthique]が設置された。こうした流れはすでにある種のライシテの転換（ライシテの第三段階）が生じていることを意味しており，そこでは宗教的信念の有無にかかわらず，いわば「生命倫理の聖職者」に物申すことが出来るという，医療の脱神聖化の文脈を読み取ることが出来る。このような変化が，良心の自由のための新たな闘いとしての「尊厳死をめぐる問題」に影響を与えているのはいうまでもない。市民の了解か，聖職者の了解か。医療における特権的知識人，および政治的に強制された医療＝宗教的支配システムを拒否することへの可能性の追求こそが，前半の全体を通じてのボベロの主張であることが示唆される章となっている。

こうした近代フランスにおいて醸成された医療と教育への新たな信頼と信仰は，社会学者アンソニー・ギデンスが指摘したように，次第に特定のグループの人々を利する形での「制度の神聖化」に繋がっていったのとともに，社会的な実質とは相入れないものへと変容していったと見ることも出来る。エリート達により形成され，実際の社会生活の共通規則とは乖離した「信仰」への強制は，次第に政治的な手段の一部としておこなわれるようになったことから，人々の信頼と信仰がそこから離れていく結果を招いたとも言えるのではないか。続く後半部である「第 II 部　医療理性の危機」においてリオジエは，こうした問題意識を引き継いでいるように見える。

第 5 章の冒頭においてリオジエは，医療というのは社会とその矛盾を写す鏡であり，そこに見られる病院の危機とは，そのままその社会の危機として捉えられるとしている。近代の病院においては既に理論と実践の間の矛盾は隠し難いものとなっており，それはそのまま，社会保障制度を基礎とするフランス型の福祉国家モデルの危機という文脈で読み取ることが出来る問題でもある。これについてリオジエは，以下のように述べている。

「病院は，ヨーロッパが過去二世紀近くのあいだ経験してきた複数のプロセスが合流する制度でもある。政治面では民主化，経済面では産業化，近年では社会文化面での個人化のプロセスがある。民主主義的なイデオロギーの観点からは，病院は収入を問わず万人に平等に医療を保障しなければならず，マクロ経済学の観点からは，病院は産業に必要な労働力の作業能率と稼働率を最適化しなければならない。」(pp.149-150)

またリオジエは，ピエール・ブルデューの「表象の現実と現実の表象」という一節を引用しながら，「表象－価値－決定－行為の連続体」についての説明を試みている。ブルデューが「身体化」と呼ぶものは，価値観は内面化されるほどにそれが価値観だと気付かれなくなるものを指す訳であるが，その場合，価値を検討するということは「表象－価値－決定－行為の連続体」を検討することにつながるとした上で，病院でのケアの需要が量的にも質的に

も増大し変化しているのは，ポスト産業型社会の市民（この場合はフランス人）のこうした連続体が大きく変容しているからだとしている。こうした神話とも呼べるような価値観の変化は，それに伴って世界観や表象を変容させるのであり，それはそのまま，続く第 6 章の健康についての議論につながっていく。

第 6 章においてリオジエは，産業型社会の健康や，ポスト産業型社会の健康について論じていく中で，健康観の象徴的変化と具体的変化について述べている。そこで広がっているのは，医療行為への盲目的な崇拝と，即効性や無責任の増幅という問題である。リオジエは，それについて以下のように述べている。

「かつては神聖な職務の遂行者，聖職の従事者だった医師の地位は，出来合いのマニュアルを遵守しなければならないただのサーヴィス業従事者の地位に近くなってきている。これはより大きな文脈から言うと，科学が世界を丸ごと説明する知識のプロジェクトとしての信憑性，普遍的な知としての信憑性を喪失して，充実感を増大させるにはある程度役立つものの，不完全で改良の余地を残したただの道具になり果てたことに関係している。」(pp.163-164)

病院は今，生活の場所，生から死への旅立ちの場所であるとともに，社会的包摂の場所であるとされており，病院の模範像や表象が複数存在するのは，健常と病理の境界線が移動したことにも起因するとするリオジエは，こうした新しい価値観を「個人世界系(individuo-globaliste」)と形容しているのであるが，こうした想像上の図式は社会のあらゆる領域に浸透しており，例えばケアという考え方の正体はまさにこれにあたるとしている。自己陶酔的な没頭により自分は大いなる世界に貢献しているのだというこうした感覚は，実際のところ矛盾に満ちたものなのであり，イデオロギー的な辻褄合わせの産物なのである。これが時に集団的で象徴的な暴力として行使される時，その地位のことは議論されない（例：西洋中産階級という地位)。リオジエのこうした考えは，権力を行使する側が唱える「ケアと共感」というものに概ね批判的な立場である書評者が，その理由を考えるときの論拠とかなりの部分で重なるものである。そして，それを最も自覚しなくてはいけない人たちが，自らの行使する「象徴的暴力」に最も無頓着な人たちであるという部分も肯首するばかりである。これは何も西洋中産階級に限らず，全ての権力を行使する側の人々に当てはまる法則であると言ってよいであろう。

公立病院をはじめとした医療機関は，これまで社会の価値観の緩やかな変化に対応してきたが，ここ数十年間に生じたこのような価値観の変化には対応しきれていない。こうした病院の危機の中心には，三種類の価値観（伝統的価値観，唯物論的または安全重視の価値観，先進産業型社会に出現している「ポスト唯物論」的価値観）の錯綜が見られるとリオジエは述べている。このように複数のパラダイムの中に同時に足を踏み入れている状況，つまりポスト産業型パラダイムと，産業型パラダイムの双方に対応しなくてはならない状態は，病院の産業化と医療への幻想を一層誘発させる原因ともなっている。これはウェーバー流に言えば，病気だけでなく人間そのものも客体化しながら，健康な人間社会の土台を純粋合理的な土台に作る実験台にしているということになる。この具体例としてリオジエは，サイバネティクスによる医療への影響などをあげている。

フーコーの言うところの「病院の医療化」についても言及しながら，リオジエの議論はさらに第 7 章，第 8 章，そして結論に向かって続いていくのであるが，要約すると，現在のフランスは産業社会からポスト産業社会に移行しつつも，古い論理と新しい論理が矛盾しながらも双方に影響を与えあっており，その結果，社会における医療のあり方が時に引き裂かれる状況が生じているということが論じられている。こうした「幻想の劇場」としての医療と病院においては，病院の産業化や医学の進歩という，産業型社会の幻想に依然として囚われているのと同時に，病院が貧困者を対象とする新封建型施療院へと向かって逆戻りするリスクにも常に晒されており，それにどのように抵抗・適用するのかが今後の鍵となっている。

宗教と正面から向き合い格闘する中で獲得してきた共和国の威信や理性といったものが今日にあって揺らいでいるという事実は，医療が脱幻想化された後に残る新たな共和主義的な医療のあり方への新たな模索の必要性を明らかにしている。以前からの医療教権主義に戻ることが出来ない一方で，改革を迫る新しい病院ガバナンスの理念やイデオロギー，経済効率重視の新自由主義的な市場論理による経済競争などに巻き込まれる，こうした現状において繰り広げられる象徴的闘争は，医療を脱神聖化しつつ病院を救うためにはどうしたら良いのか，またあるべき病院の姿とは何かという問いにつながっている。

こうした中でリオジエは，神聖化された医療やそれを取り巻く環境に様々な課題があったように，脱神聖化された医療やそれを取り巻く環境においても問題は存在しており，そうした問題を少しでも改善していく為には，消費社会において個人が世界とつながる感覚（個人世界主義）の両義性の正の側面を活用していくことの可能性に言及している。この点は負の側面の危険性も含め（書評者はむしろこれをより重要な論点として指摘する立場にある），さらなる議論が必要なところではあろうが，最後の「補論 1　コロナ禍における医療の脱神聖化と産業主義体制の危機」も含めて読み解くとすれば，新たな主体の政治学や社会運動への模索，つまり既成の医療や医療社会的な規範や制度の内側から，市場や共同体主義に抗いながら，いかに主体としての権利を要求・提言することが出来るのかへの試みであると理解出来そうである。リオジエにとって今回のコロナ禍とは，現実の民主主義にとって代わった産業主義の凄惨な現実を目の当たりにして，市民意識を取り戻すことの必要性を認識する機会であったということなのであろう。いずれにしても，理性の神格化は原理的に矛盾を孕んだものであり，その結果として非合理的なものに道を開いてしまう可能性は十分にありうる。神格化された理性ではなく，批判的合理性の重要性こそが，新しい医療に向かって今こそ改めて認識されるべきなのである。

最後に，全体のまとめも含め，ボベロによる「補論 2　一人の介護者という立場から見る現代フランスの医療」に言及して，このささやかな書評の終わりとしたい。この中でボベロは，認知症を患う夫人との生活について，研究者であり家族・介護者であるという立場から，現代医療に対する批判的な洞察の込められた論考を記している。研究者／介護者としての両義性が滲み出る彼の文章を読む中で，本書にも繰り返し出てきた「医療的教権主義」に「良心の自由」を持って対抗し，最愛の家族を守ろうとする彼の姿勢と選択に敬意を表したいと感じたのは，彼の世代や立場，属性の男性にとってそれは決して容易なことではないと理解出来るからであるし，この感情はおそらくご夫妻と直接対面した経験によるところも大きいと考える。

その上で，ボベロがこの「あとがき」は学問的なものではなく，本書で論じた革命から現代に至るフランスの医療史についての，別の主観的な見方を示すとしているのは，やはりどうしても戦略的なものにも読めてしまうのは穿ちすぎであろうか。少なくとも，別の主張が込められていると言えるのではないか。なぜなら，こうした個人的状況の報告という私的証言を，このように出版するということの位置付けを考えれば，やはりそれは何らかの公的色彩を帯びるものだと考えざるを得ないからである。例えていうなら，人に読まれることを想定した日記のようなニュアンスといえば良いであろうか。聡明なボベロはおそらくそれを十分に理解した上で，この補論を執筆していると書評者は感じているのだが，パレーシアの精神を持って敢えて言及するならば，やはり「良心の自由」を守れる状況そのものが，現代社会においてはすでにある種の「特権」なのだということである。

これは本稿の前半で言及した，ボベロとリオジエの研究の共通点の話と重なる，光と影を帯びた部分でもある。具体的に言えば別の介護者に介護を依頼出来るような選択の余地さえない人たち（「他者」）が世界には多くいること，時にかれらは「他者」として客体化・モノ化され，所有・消費の対象とされ，資本として蓄積される状況下で格闘せざるを得ないこと，それによってそれぞれの人生が破壊されても何も言えないような状況にあるということ，などである。そのように考えれば，やはり二人がここでそうした他者の立場への共感の姿勢を示すのは偽善的であり，所有や消費といった問題の再生産でしかないのではないかという論点は，そこに横たわる絶対的な共約不可能性とともに，どうしても浮かび上がらざるを得ない。

こうして尊厳や「良心の自由」を踏みにじられている人々との相互理解の可能性と不可能性にどのように向き合っていくのかは，本書の内容を踏まえた上で，前述のリオジエの提言を補助線に考えるとすれば，市場や共同体主義に抗いながら，お互いの立場の違いを超えていかに主体としての権利を要求・提言するための協働が出来るのかを試みるということしかない。ここで求められるのはやはり神格化された理性ではなく，批判的合理性なのである。これこそが，筆者が本書から引き出せた現時点での結論であることを明記して，本稿のとりあえずの締めくくりとしたい。

参考文献

アーウィン・H・アッカークネヒト『パリ，病院医学の誕生』舘野之男訳，みすず書房，2012年

フランソワ・アルトーグ『歴史の体制　現在主義と時間経験』伊藤綾訳，藤原書店，2008年

アンソニー・ギデンス『近代とはいかなる時代か？――モダニティの帰結』松尾精文・小幡正敏訳，而立書房，1993年

イヴァン・イリイチ『脱病院化社会――医療の限界』金子嗣郎訳，晶文社，1998年

ユルゲン・ハーバーマス『イデオロギーとしての技術と科学』長谷川宏訳，平凡社，2000年

マイケル・バリント『実地医家の心理療法』池見酉次郎他訳，診断と治療社，1967年

ミシェル・フーコー『臨床医学の誕生』神谷美恵子訳，みすず書房，2011年

ミシェル・フーコー『わたしは花火師です』中山元訳，ちくま学芸文庫，2008年

ピエール・ブルデュー『ディスタンクシオン――社会的判断力批判 I』石井洋二郎訳，藤原

書店，1990 年
ジャン・ボベロ『フランスにおける脱宗教性（ライシテ）の歴史』三浦信孝・伊達聖伸訳，白水社文庫クセジュ，2009 年
ラファエル・リオジエ『男性性の探求』伊達聖伸訳，講談社，2021 年